

【解説】これは、ロシアの海外向けチャンネル RT (Russia Today) の電子版から拾った記事である。ウクライナを始めとする現時点の世界的紛争が、どういうものであるかがよくわかるように、アメリカと古代ローマの平行関係によって論じている。これはデイヴィド・ウィルコックが『ザ・シンクロシティ・キー』で、厳密な歴史の繰り返しの例として詳細に論じている観点である。この問題はロシア側からでないと、はっきり見えてこないと思われる。これをこの本のほかに、本欄「ウクライナ紛争：何が真相か？」(5/18掲載)と併せ読まれることを希望する。筆者はロシア人でなく、ロシア側のバイアスがかかった論文ではないことは、一読して判断できるだろう。

ワシントンと古代ローマの並行関係が明らかになる

By: John Wight

May 13, 2014



そのローマの先行者と同じく、ワシントンは経済、政治、文化すべてに及ぶ地球的帝国を支配している。これは、その敵対者や、敵対者の潜在的同盟者をはるかに凌駕する軍事的能力によって確保されている。

そしてローマが支配していた時に、知られた他の世界のすべての人々がローマ市民という特権にあこがれたように、今日、何百万という人々が、信用と身分の必須条件と感じられるアメリカ市民権を夢見ている。

定着した最大の神話の一つとしての“アメリカン・ドリーム”の魅力は、長年にわたって

何百万という移住者を、世界中からアメリカ合衆国へ吸い寄せることに成功し、その経済力をさらに増大させた。

のみならず、かつてローマと文明の間に存在した結びつきは、今日、アメリカと民主主義の間の結びつきとして反映されており、これは 21 世紀の文明の疑問の余地のないバロメーターと考えられている——たとえ、これら両帝国の持久力ある権力が、戦争を次々に起こす彼らの意欲と能力に、圧倒的な規模で支えられていたとしても。

その長い歴史を通じて、ローマによって戦われた無数の戦争は、過去 1 世紀だけでも、ワシントンによって起こされた戦争に匹敵すると言ってよい。世界のあらゆる地域において、アメリカの軍事力は、何らかの形で、隠然とあるいは公然と、アメリカの地政学的・経済的優越性を維持する目的で展開されてきた。

ワシントンの法典を固定させようとするこの努力の前線は、現在では中東および東欧、特にウクライナである。前者についてアメリカは、そのさまざまな地域的な、地政学的同盟国に支持されて、過去数十年にわたって混乱と大虐殺の種をまき、紀元前 59 年、ガリア地方侵略のときにカエサルが使ったような口実を、あとから付け足した。

最初はイラク、次にリビア、そして今度はシリアが、今日のワシントンによって文明への脅威だと説明されてきたように、ガリアと、この広大な古代ヨーロッパの奥地を開いた多くの種族は、貪欲なローマのエリートによって、同じように脅威とみなされた。それは更に大きな富を手に入れ、飽くことのない権力への欲望を満たすためであった。

そして現在、アメリカとその同盟国の関係がそうであるように、ローマにもまた、権力の正しい側について、世界の資源の分け前にあずかろうとする地方総督や国家や種族がいた。



ローマは、いかなる法も、帝国主義権力の行使へのいかなる障害も、彼ら自身の作った法以外は、完全に無視した。同じように今日のアメリカは、彼ら自身の帝国主義的権力の行使において、あきれるような露骨な、国際法無視の態度をますます示すようになった。国連は、ワシントンですでに決定された事さらに押されるゴムのはんこにすぎない。そして、現在のシリアでの緊急の軍事介入のように、国連がゴムのはんこであることを拒否する場合には、何の良心の呵責もなく、大統領とその閣僚の決定以外には、何らの正義の口実もなしに彼らの意志がまかり通る。

しかし、ワシントンの法典を世界中に押し付けようとする、増大する露骨な力の行使が、これまでにない経済の衰退を招き、1991年のソヴィエト連邦の崩壊とともに確実になったように見える、ワシントンの一極世界という目標に抵抗する、中国とロシアの台頭を招いたのは、意味のあることではなかろうか？

ネオコンの意を受けたフランシス・フクヤマが書いた『歴史の終わり』は、ソ連共産主義のイデオロギー的敗北と彼らが考えたものに対する、アメリカ政府を狂喜させた勝利の感覚を、反映するものだった。資本主義と自由な民主主義が文明と発展の頂点として永続するだろうという信念が、優勢だった。それは極端に達した思い上がりであり、9.11という残虐によって、その信者は返り打ちに遭ったのだった。

そのとき以来、軍の力の行使はアメリカ社会を上から下まで毒付けにした。暴力を受け入れてこれを神格化することが、アメリカの文化に根付いている——それは露骨な不平等と、何百万というその市民の生命を枯死させる社会的・経済的な不正に現れている。文字通りの意味において、国内での不正が、ワシントンが自由民主主義の煙幕のもとに海外で行なっている不正の土台となっている。

国内でも海外でも、ワシントンは自分で作り出した危機の危機管理をやっている。この点では、それはちょうど通り道のすべてを破壊し、その跡に死と破壊だけを残す、制御不能の“ジャガーノート”（クリシュナ神像の巨大な山車）のようだ。有名な話だが、ガンジーが西側文明についてどう思うか尋ねられ、「それはグッド・アイデアだろうね」と答えたとき、彼はアメリカ政府から広がった修辞と政策の間の食い違いを、完全に言い表していた。

アメリカの覇権主義の下で呻吟する世界に希望があるとすれば、それはすべての帝国が滅びるように、ローマ帝国も最後には滅びたという事実である。ローマのストア派哲学者セネカが同国人に警告したように、「不正の上に築かれた王国は長くは続かない」のである。

ワシントンとその同盟者は、耳を傾けるべきである。

(ジョン・ワイトは、地政学や連合王国の政策、文化、スポーツを専門とする作家・コメンテーター)